

結城昌治

明日の風



結  
城  
魯  
治

朝日新聞社

明日の風

第一刷発行——一九八六年五月三十日

定価——一一〇〇円

著者——結城昌治

発行者——川口信行

印刷所——大日本印刷

発行所——朝日新聞社

〒東京都中央区築地五十二-1

電話・〇三―五四五〇―三二(代)

振替・東京〇―一七三〇

編集・図書編集室 販売・出版販売部

© Shoji Yuki 1986 ISBN4-02-25526-2

## 目次

I 経天然色

傘寿の計 10

小さな石地蔵 12

やくざ今昔 14

ベストテンごっこ 16

人の呼び方 18

当たり外れ 20

ババラギ 22

落第生諸君よ 24

税制のひずみ 26

卑下自慢 28

愚痴のすすめ 30

享年調べ① 32

享年調べ② 34

ご難つづき 36

坊主頭 38

墓参 40

連句がおもしろい 42

ギャバ 44

お邪魔電話 46

泉への道 48

職業と職名 50

難問 52

血圧と締切り 54

「そいや、そいや」 56

煙草について 58

浮世の果は…… 60

わが青春のクロワッサン 62

死に上手、死なれ上手 64

辞世の代わり 66

幻視幻聴 68

総天然色 70

## II 多病多難

不況時代の記憶 74

睡眠薬と三十年 79

思いこみ 81

ただいま休筆中 85

多病多難 93

宙ぶらりんの世代 97

### III ニューヨーク十日間

港の感傷 102

下谷坂本界限 106

もう沢山 108

わが町——世田谷区奥沢四丁目 110

ニューヨーク十日間 113

### IV 金原亭馬生の死に方

無念の思い 140

療養所時代の福永さん 144

金原亭馬生の死に方 149

ダンディズムについて——桂文治(十代目)

桂文楽と速記本

159

丸谷さんの笑ひ

162

「串弥呼」まで頑張れ

164

塙さんのこと

166

## V 俳句の周辺

私の愛誦する一句

170

故郷のごとき

172

俳句の周辺

175

忌日の句その他

179

小説家の余技

182

俳句と推理小説

186

芝居と俳句

191

「くちなし句会」ふたたび

194

## VI 本とのめぐり会い

福永武彦と推理小説

200

掘出し物

205

幸運な出会い

209

|                |     |
|----------------|-----|
| 「地中の男」         | 211 |
| 「押絵の奇蹟」など      | 213 |
| 「ミンドロ島ふたたび」    | 217 |
| 「きけわだつみのこえ」を読む | 219 |
| 「森繁自伝」         | 223 |
| 「烙印の女たち」       | 228 |
| 「兵卒の鬚」         | 231 |
| 「ホーデン侍従」       | 235 |
| 実説・仕立屋銀次       | 239 |
| あとがき           | 255 |

# 明日の風



# I

## 総天然色

## 傘寿の計

傘を略して今と書く。それが八十と読めるところから八十歳を傘寿さんじゅといつて、長命を祝うならわしがあるけれど、近年は医術が進歩したおかげか日本人は人生八十年時代を迎える。もう「人生七十古来稀」という詩句は通用しない。六十歳の還暦も定年を連想されるのがオチで、容易なことでは天寿を全うしたと言われなくなっている。もちろん短命より長命のほうがいいにちがいないが、高齢化社会のむずかしい問題は別としても、八十年という歳月は並たいていの長さではない。むしろ人生わずか五十年といわれていた頃のほうが気楽じゃなかったかと思うくらいである。そこで私自身を反面教師のつもりで引き合いに出すと、私は二十代の初めに結核にかかり、ストマイなどの薬がない時代だったから、左右の肋骨を計十二本も切る手術を受けた。風聞ながら予後のいのちは数年といわれていて、そう聞かされればそう思うほかなく、せいぜい三十歳までのいのちと自分できめてしまった。やけにならなかったのは母がいたせいとか、もともと生命に対する執着心が乏しかったせいとか、あるいは楽天主だったせいとかよくわからない。とにかく短命を意識したことは確かで、家庭をつくることなど考えなかったし、小説を書くようになってからも

ところが、文筆生活に入って丸二十五年経ってしまった。これを誤算と言っては罰があたるだろう。療養所にいた知友人はあらかた亡くなっているの、幸運を感謝しなければいけない。

しかし、こんな生きのびるとわかっていたら十年先二十年先の計画を立て、もっと腰を据えた仕事に取り組んだかもしれないと考えることがある。怠け者だから実際はあやしいものだけれど、つい考えざるをえなくなってしまう。いまさら悔いているわけではないが、走行距離に比例してガソリンが減ってきた感じで、肺活量が健康な人の四分の一しかないありさまである。全寿の計など到底望みえない。

だが、若い人たちはちがう。不慮の事故や病気を避けられるなら、望まなくても長命を保証されている。まさに「少年よ大志を抱け」であろう。

私のほうは相変わらず二年先くらの仕事止まりで、せめて一日一日を大切にしたいと思うばかりだ。

合あ躰ひの花夢をもたねば老い易やすし

福田蓼汀

## 小さな石地藏

仕事部屋の隅に石のお地藏さんが置いてある。身の丈十五センチたらず、小さいから片手に軽くおさまってしまう。祀っているわけではなく、飾っているわけでもない。ただ手放せないまま置いてあるだけで、こんなことを書くとき心の厚いひとに叱られるかもしれないが、初めは文鎮代わりのつもりで買った。二十年ほど前、日比谷で映画を見た婦りだった。映画館の近くの古道具屋をひよいとのぞいたら、背恰好の似た十数体の石地藏に売り値がついていたのである。

私はそれらのうちの一体が気に入ってしまった。単純で素朴な彫りだけれど、合掌している姿が自然で、じつにおだやかな顔をしていた。重さも手頃だった。

これは文鎮にちょうどいい。

無信仰な私はそう思って買った。値段は五百円と記憶しているが、気まぐれな買い物だった。当時は路傍の石仏ドロボウが横行していたらしく、いなか道の道祖神までトラックで掻っ払っていく業者がいたという。庭石にしようとする不心得者の需要が多かったにちがいない。

だが、私はそんなことは知らなかったし、知っても咎め立てする気は起こらなかったろう。ど

れた江戸時代の囚徒たちが労役の合間に刻んだもので、石ころ同然に捨てられていたため拾われたのではないか、と考えていた。

いずれにせよ、私にとっては文鎮代わりにすぎなくて、しばらくは机の上で重宝していた。

ところがである。そのうち粗末にあつかっては済まないという気持が生じてきた。私は不孝を重ねたまま両親を亡くしているが、長男のくせに年忌などの法要を営んだことがない。家人に気づかれるまでは位牌もボール箱にしまい込んだきりでいた。不信心の元には戦時中あまりに多くのむごたらしい焼死体を見た空襲体験がかかわっているけれど、縁なき衆生しゅじょうは度しがたしと言われても仕方がないのだ。

しかし、いまの私は五百円で買ったお地藏さんにそっと両手を合わせることがある。まるで信仰を得たように、両親や知友人の冥福を祈るかのよう——。

どういうわけか自分でもよくわからない。

仏壇に先祖こみあふ涼しさよ

長谷川双魚

## やくざ今昔

むかしといっても私が憶えている範囲内だから昭和十年代後半だが、当時はやくざ、テキ屋、愚連隊の別が割合はつきりしていた。やくざは賭場をひらいてテラ銭をかせぐ。テキ屋は盛り場のほか祭礼や縁日をまわり歩き、巧みな口上であやしげな物を買わせる。すぐに止まってしまいう腕時計とか、使いものにならない万年筆とか、気合術や記憶術の極意書売りなどもあった。売るというより、買わせるのがうまいのだ。かなり詐欺に近いが、騙されたとわかって怒る気がない。みごとに芸を見せられたようで、腹が立つ前に感心してしまう。

愚連隊は「ぐれる」の当て字で、いわゆる不良、与太者である。

そこで話を戻せば、私の家の近所にSというやくざがいたが、世間をはばかっている感じで、ほとんど姿を見せなかった。もちろん私のような不良中学生なんか相手にしない。たまに見かけると、顔をそむけて足早に去っていった。たぶん、うしろ暗い渡世を自覚していたせいにちがいない。

Sを最後に見たのは戦争の末期だった。Sにも召集令状がきたのだ。Sは着流しを国民服に着